

令和 3 年度
 社会福祉法人大五京
 ポラリスこども園
 自己評価結果公表シート

1. 本園の教育保育目標

保護者の協力を得て、多くの良質な体験を通して自信を持たせ、園児個々の成長目標を達成する

- ・心情(Feeling)の豊かな子ども…「感情表出」「愛情」「他への理解」「申告意欲」「試行意欲」「連帯意欲」「正義感」
- ・態度(Manner)の良い子ども…「挨拶」「謝罪」「感謝」「懇願」「自己責任」「選択責任」「勝者の義務」
- ・自主的に行動(Behavior)できる子ども…「規律遵守」「忍耐」「勇気」「責任感」「委任追従」「自己主張」「自己顕示」
- ・個性(Identity)豊かな子ども…「演出表現」「演技」「言語」「心情表出」
 「絵画制作」「興味・関心」「集中・熱中」「創造・想像」
- ・健康(Health)な子ども…「運動・体力」「走・跳・投」「泳・潜」「持久意欲」

2. 今年度、重点的に取り組む目標、計画

- ①6学年各クラスの担任が、クラスのお子さまの成長枠を理解し、教育・保育する
- ②学年主任がクラス職員の意見を吸い上げて、相互の意見交換が出来るようにする
- ③社会人としての立ち居振る舞いを行う

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

評価項目(課題)	取り組み状況
① ①昨年度1年間で担任を持つ学年の特徴や成長枠を学び、視野が広がったので、継続してより一層の学びを広げる	担当学年の子供性や、取り組むべき保育、教育内容を掘り下げて勉強、研究し知識向上を目指しながら進めてきた。
② ②クラス間での意見交換の活性化と、新しい考案の発言機会を広げる	日々は勿論、クラス会議においてお子さまの発達や育ちに適切な対応を考え、ふさわしい環境設定が出来るかに目を向けて意見交換したり、発言する場を増やしてきた。
③ ③社会人としての常識やマナーレベルの向上	毎月10名以下に絞ったメンバー構成で、全員が多く発言できる環境設定をしての会議の中で、マナーについてや一般常識レベルを図った。

4. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

年齢に適した保育・教育が計画的に進めて行ける職員が増え、お子さまの多様な特性にも向き合っ、適切な対応ができる様になっている。自身の目標を文章化し、毎月自己評価をしていくことで、日々の意識に変化がみられた。またそれを発表する事で、更に目標が明確になり、前進していく姿があった。少人数制の会議では、職員の考えや関りが透明化し、個々に応じた指導が出来た事と、園の方針や方向性がより伝わりやすくなったと言える。

5. 今後取り組むべき課題(次年度へむけて)

課題	具体的な取り組み方法
① 1年間の子どもへの対応策を生かして、更なる知識向上を目指す。それに伴う保護者対応力と知識の向上。	子ども個人の特性を書き出し、対応策とその結果を記録する。前回の振り返りを常に行い、タイムリーな対応を保護者とともに出来る様、保護者との連携を習慣化し、対応力を身に付ける。
② 職員個人目標をクラス内が共有して、互いに目標を意識しながら保育を見せ合うことで相乗効果を図る。	個人目標を掲げて、一覧にし、クラス全職員が理解できるようにする。毎月のクラス会議時に、個人の1ヶ月の振り返りを持ち寄り相互に評価し合う。振り返りシートを用いて、話し合いの結果を明確に記述して残す手順を行う。
③ 多様な角度から話し合いを行ったり、園内公開保育、交換研修を行い、保育・教育する立場での適切な考え方を持つ人材を育てる。	毎月の代表会議に交代制で参加し、発言や伝達を行う(記録を残す)・公開保育にて職員同士互いのスキルを学び合える環境を作る。

6. 学校関係者の評価

●令和3年度学校評価コメント (案)

令和3年度は総じてみて、前年度に続き、新型コロナウイルスの感染拡大状況に合わせた運営がより一層、求められた一年であったと言える。法人に所属する各施設は特に緊急事態宣言の発令や蔓延防止等重点措置の適応がいち早く出される地域であったことから、常に先行事例がない中で、ウイルスの変異や社会からの要請、また何より管轄する行政によって指示される内容のみならず、対応の早さの違いといった様々な変動する要因に対応して、法人本部と各施設、あるいは保育士と看護師といった様々な部門、階層での重層的で密接な連携強化が行われ、お子様の健全なる成長に寄与する保育と保護者様への就業支援という法人の存在意義を余すところなく発揮してくれたことが総括として感じられることである。

具体的にはコロナ禍の移動制限にかまけることなく、積極的にICTを利用した多くの研修や様々なミーティングを積み重ねることで人材育成に努められ、更には保育の見える化にもICTを十二分に活用されることで保護者の皆様のご理解を深める活動にも注力されていたことが印象的であった。このようなICTの活用は、今後においても発展的に活用されていく予定であるとのことなので大変期待できる。

特筆すべきは、年に一度、開催されているアワードバンケットという取り組みである。アワードバンケットは各施設、あるいは各職員が日ごろ培ってきた新しい保育方法や教材の開発にとどまらず、保護者様への対応、地域との連携、人材育成方法、経営管理といった複数のカテゴリーにおいて研究発表を各分野における外部の専門家の評価及び指導を受けるイベントであり、それを活用して各施設や各職員が持つ暗黙知を形式知化して組織全体へ切磋琢磨しながら学び、波及させていく試みは実質的なスキルの向上にとどまらず、全体的なモチベーションと専門職である保育士というプロフェッショナルリズムの向上と活性化に大きく寄与していたと思われる。特に、令和3年度はICTを使い、全職員がリモートで参加できるようにしたことは前述したこの間に得られた優れたICTの活用であり、新しい試みであったと言える。

三密が忌避される中で保護者様との連絡が通常より難しくなったと言われることが多いが、全ての職員がモバイル端末を以前から常に携帯しており、それを使っての物理的な距離を超えたより一層の緊密で濃密な連絡や報告、相談が日々、行われていたことにも大変感心した。その他、高評価を頂いているビュッフェや基準以上の職員配置など特色ある運営は変わらず行われており、変化は無かったことにも安心させられた。

ただ、ICT化への先行投資や新型コロナウイルス感染拡大への対応のための出費などの必要なことではあったが、決算予測としてやや厳しい状況にあることが報告されており、そのことが今後の注意すべき大切な課題であると考えている。

次年度以降も、予算の適切な執行に基づいた保育と就業支援の理想的展開を心掛けていかれることを理事会及び評議会としては連携して管理監督していくつもりである。

令和4年3月23日 理事会